

# 横光利一作品集

## 第五卷



橫光利一作品集

第五卷

創元社

横光利一作品集 第五卷

定價 一三三〇圓

著者

横光利一

發行者

東京部中央區日本橋小舟町二ノ四  
小林茂

印刷者

東京部大田區田圃調布一ノ二三二四  
淺野剛

發行所

東京部中央區日本橋小舟町二ノ四  
株式會社 創元社  
(大阪市北區桶上町四五)

昭和二十六年十一月二十五日初版印刷  
昭和二十六年十一月三十日初版發行

電話茅場町(66)二〇六四・四〇八三・五二六三  
振替東京一五六五・大阪五七〇九九

金羊社印刷・鉛木製本

萬一落丁亂丁本がありましたら取替へます

家族會議 · 短篇



家族會議……………六

青 春……………一五二

厨 房 日 記……………一〇〇

解 說……………古谷綱武……………三三

裝  
幀  
小  
磯  
良  
平

家  
族  
會  
議



日本橋の小網町から蠅殻町いつたにかけた夏の夜の運河の景色は美しい。とりわけ雨上りの夜、青い洋燈を灯した夜の釣の舟が出て行くころ、三菱倉庫のそびえるあたりの静かな波はベニスに似てゐる。この傍の水に面した二階家が重住高之の住家であるが、ここの家は舊家であるから法事が近づくにつねの家よりも何となく氣忙しい。かうして重住家の法事もやがて始まらうとしてゐる。

高之は父の法事に大阪から上京して來る泰子待つてゐるといふものの、思へば苦しいことも數々あつた。高之はまだ獨身だが、もう結婚しなければ周囲のものが承知をしない。けれども、あまり候補者の澤山ありすぎるといふことは、つまりは結婚難とも同様である。彼は閉つた店の日本間でひとり銚子を傾けながらも、亡き父の最後を思へば、結婚のことなどときには頭から消え失せた。右を積んだ荷舟が今にも沈みさうな不安な様子で河口の方へ下つて行つた。上げ潮の揺らめく運河の音を聞きつつ、柱の時計を眺めてみるともう夜の九時である。さきほど共同で店をやつてゐる尾上の娘の春

子から電話のあつた約束の時間も迫つてゐるので、そろそろ着物を着替へねばならぬと思つてゐるところへ、また電話のベルが鳴つた。電話口まで出ていくと、やはり春子からである。

「もう出かけようかと思つてたとこなんだよ。」と高之は云つた。

「さう、それはよかつたわ。あのね、あたし、歌舞伎座の二階にゐるんだけど、梶原さんのお嬢さんも來てらつしやるの。先日お話した方よ。」

先日春子から話された嫁の候補は三人もあつたのだが、梶原清子といふのはその中の一人で、矢張り高之と同業の株式仲買店の娘であるばかりでなく、東京製紙の同じ大株主であつたから、名は前からよく聞かされて知つてゐた。しかし、高之は見合をするのは好きではなかつた。話が調はないなら相手を傷つけるか、自分が向ふに傷つけられるかどちらかなのだ。しかも、不意打の見合は馴れてゐるとはいへ、云ふに云はれぬ無氣味なものであつた。

「もう見合はやめだよ。よいやうに君から斷つといて貰ひたいね。」

「駄目、駄目、出てらつしやいよ。すぐよ。ちや、さやうなら。」

こちらの返事を待たず春子は電話を切つた。もう仁禮泰子、

が大坂を立つたところだと見當をつけて、急に高之を呼び出した春子——この春子の計畫は高之にもよく領會出来るのであつた。つまり、春子の暗躍を當然のこととしなければならぬ弱味を、彼も十分に持つてゐるのである。

彼は春子が思つてゐるほどに泰子に心をひかされてゐるのではないのだが、總本家の一人息子として、いづれは泰子と結婚する羽目になるのであらうと、春子を初め親戚達の想像してゐる誤解の渦の中に高之はゐるのだつた。

「さて、困つたな。」

と、彼は一度は銚子を持つてみたものの、春子の親切な誘ひを思ふと出て行かないわけにもいかなかつた。

「まあ、なるやうになるさ。」

と、かう呟きながら高之は氣安に着物を着替へにかかつた。蚊飛白の結城に、黒献上の角帯を締めた彼の姿は、大學を優秀な成績で出たインテリとは見えぬ。見やうによつては西班牙人かと思はれるやうな、きりりと顔の締つた淺黒い美男であつた。昭和七八年代からこちら、この種の青年がわが國には汎濫して來たが、彼もそのうちの聰明な懷疑家を特長とするかに見える一人である。

歌舞伎座ではもう道成寺の幕が開いてゐた。正面に和風、その右には柏伊三郎、どつと拍手の上る中から、早くも得意

の替手が聞えて來た。高之は二階の横から春子の場所を探してみた。丁度正面右よりの前方に、思ひがけなく近く春子の姿が見えた。白地にお納戸の竹の一本縞の着物が、ぱつと一眼でそれと見分けのつくその横に、あれが梶原清子であらう。藤色の御所解模様の菊畑が、淡地の着物に浮き出でゐる。勝氣さうなほつちりした眼もとである。

あの顔はどこかで見たぞと高之は思つた。三味の合の手が、つるつるたるやうに流れるままに、

「菖蒲杜若は何れ姉やら妹やら、わきて言はれぬ花の色。西も東もみんな見に來た花の顔。」

和風の唄に合せ、うつとりとなる縮緬の手拭で顔を隠し、差しさうに立つた菊五郎——柳葉眉毛の撫でたいやうなでやかさに、思はず高之は泰子の騰けた瓜實顔を思ひ浮べた。不思議なもので人はうつとりとすると、つい一番心をひかれてゐるものの顔を思ひ出す。しかし、彼はもう戀愛だけは苦手だつた。早く身を堅めてこんな商賣はやめなくちや。

と、かうまたいつものやうに思ふのだが、それなら、さて仲買店をやめて何をするのかとなると、彼にも一向に分らなかつた。

幕が降りて汗ばんだ觀衆がむつと廊下へ溢れて來た。高之はソファにもたれてゐるとき、早くも春子は彼を見つけてよつて來た。

「いつ、今？ 道成寺御覽になつて？」

「ああ、見ました。」と高之は云つて清子を見た。

「さう。あのう、この方、梶原清子さん。こちら、重住さん。」

高之は立ち上つて清子と挨拶をした。清子は、これが簡単な見合と前から教へられてあつたと見えて、あまり物数は云はなかつたが、話し出せば臆する色なく話し出す強さがりんとどこか眼もとの奥深く鳴つてゐた。

「お茶いかが？」

と、春子はもう返事も待たず廊下を喫茶室の方へ歩き出した。この女性はいつでも相手の返事を待たぬ特長があるの  
で、便利なことはこの上ない。一度嫁入して良人に死に別れて以来もう結婚はこりこりだと、榮耀榮華に餘生を楽しんでゐる近代婦人の一人であつた。従つて、賢いことも眼から鼻へ抜けてゐる。喫茶室のテーブルへ向ひ合ふと春子は、含み笑ひをしながら扇子で高之の脇を突つた。

「高之さん、大阪の仁禮さん、いついらつしやるの。明日？」

「さア。」

「さアか。面白くないのね。」

高之は春子にまくし立てられるとうるさくなるのが分つてゐるので、黙つてレモンを吸つてゐると、また春子は、

「でも、もういい加減になさいよ。大阪の方なんかと結婚しちゃ、もうお終ひよ。」と、いつものしつこい調子で云ひ始めた。

「分つた分つた。」と、高之は苦笑をもらして清子を見つ、義理だけに、攻め立てられて出て來た弱さをまたも後悔するのであつた。

清子は大阪の仁禮泰子と高之の事情をもう春子から聞かされてあつたのに相違ない。かすかに微笑を浮べながらちらりと高之を見返した。すると、今まで何の感動も受けなかつた高之は、清子の微笑に静かな怨恨うらみのやうな、うす寒い美しさを感じて、「おやッ」と思つた。高之はときどき清子の顔を眺めてみた。ところが、見てゐるうちに、どことなく清子の顔はだんだん美しさを増していつた。——高之はいつもちらりと女性を見れば、もうそれで間違ひなく女性の眞價を突きとめる自信があつた。しかし、この清子に限つては、見る度に絶えず微妙な變化をしていくのである。こんな婦人は必ず運命が激しく變るにちがひない。細く締めれば糸のやうに細くなり、擴がれば爛々と光る大きな眼、通つた鼻の翼が強い氣象を浮べてよく動く。

「清子さん、何か仰言らないの。この方ね、高之さんを前からよく知つてらつしやるのよ。」

と春子は意味ありげに笑ひながら高之に云つた。

「僕もどこかでお見かけしたやうなので、さつきから考へてゐたんですかね。」

軽く清子は會釋をしながら、

「ここでせう、きつと。あたくしここでときどき——」

「さうでしたか。それはどうも。」と高之は一寸頭を下げた。

「これからお交際つまかして上げて下さらない。この方、それはそれは、あなたのファンなの。」

春子の馴れた云ひ方に思はず高之も笑ひながら、

「どうも、それは、不安ですね。」

と早速春子に應酬した。同時にまた春子と清子の笑ふ中で、

「でも、高之さん、今度の御法事は大丈夫でせうね。」と春子はやや眞面目な顔で訊ねた。

「何が？」

「何がでもないぢやありませんか。あなたとこのお家は法事が多いので、あたしいやなの。そらお祖父さんの法事だの、お祖母さんの法事だの、それが濟んだと思へば、今度はお姉さんの法事だのつて、しよつちゆう法事だらけよ。その度に大阪から出てく、仁禮さんがいらつしやるもんだから、こちらの親戚のものは、やきもきしなきやならないんですからね。あたしたち、大いに不安よ。」

「しかし、法事は法事さ。」と高之は云つて顎を撫でた。

「それはまあいいわ。だけど、法事にかこつけて、生きてゐるものの法事までして行かうてんですからね。見事なものわ。」

高之は春子の言を反らして時計を仰いだ。

「まあ、お聴きなさいよ。あたしあなたのお姉さんなんだから。」

「もう、いい。行かう。」と高之は計算を呟附けた。

「駄目よ。明日にでも來られたら、もういくら云つたつて遅いんですからね。今夜のうちだわ。そりや、關西のお嬢さんはしつこいのよ。」

と、春子はいましましさうに清子の方を見返つた。

「法事でいらつしやるのは、あたしたち我慢が出来るけれど、菊五郎の鏡獅子がかかつたから、出て來たの、やれ、羽左衛門の清心を見に來たのつて、準みたいに、ちよくちよくかすめにいらつしやるんではよ。あたし、今度はもう黙つてゐないの。あたし、お寺で逢つたらいつてやるのよ。いいでせう高之さん。」

と、春子は高之の袖を引つばつたが、しかし、もう彼は立ち上つて出て行つた。春子と清子は高之の後から喫茶室を出て行つたが、後の出し物に興味を感じなかつたので、人のゐない廊下の長椅子に休んでゐた。

「あれで今夜は成功だわ。あたしが冷かしたら、高之さん、逃げていつたでせう。」

扇子を使ひながら暢氣にうきうきとさういふ春子に、清子は、

「でも羞しいものね。あたし、わくわくして、ちよつとも重住さんを見なかつたわ。」と云ふ。

「あれでわくわくしてたの。あたしまた、あんまりあなたが落ちつき拂つてゐるんで、たいしたもんだと感心してたの。」

「いやだわ。でも、どつかあの方、優しい方だと思ふけど恐いわね。どうしてかしら。」

「大丈夫よ。ときどき清子さんの方を見ては、眼のやり場に困つて、上唇を撫でてよ。あんな風なときには、あの人少し懸へたときの。あたし、高之さんの癖、よく知つてるんだけど、さうなのよ。」

面白さうに笑ふ春子について清子も安心したらしく扇子を開いたが、すぐ止めると、またほんやり不安さうな顔に變つていつた。

「でも、大阪の仁禮さんを、そんなに重住さんお好きなの？」

「さうね。」と春子は一寸考へたらしかつたが、「でも、それはね、あたし、人の云ふほどぢやないと思ふのよ。そりや高之さん、泰子さんを好きなこととは好きだと思ふけど、泰子さ

んのお家と高之さんのお家とは、どうしたつて駄目なところがあるの。なかなかここは複雑してゐて、説明するのにややこしいんだけど、つまり、かうなのよ。」

と、春子は頭を整へるやうにしばらく黙つてゐてから云つた。

「泰子さんのお母さんと高之さんのお母さんとは、昔から裏千家のお友だちで、東京と大阪と離れてゐながら、ああして親戚も及ばぬお交際だけけど、實は、どちらものお父さん同士はそれほどぢやなかつたのよ。それと云ふのは、高之さんのお父さんは本當は大名出の江戸ッ子でせう。ところが、仁禮さんは大阪船場の商人で、これがまた同じ商賣なものだから、何かにつけて駄目だつたの。さうしたところが、あるとき高之さんのお父さんが大阪へ行つて、それはひどい思惑買ひをなすつたことがあつたのよ。手いづばいのお金で買占めをなすつてね。たいへんだつたの。するとどうしたものか、泰子さんのお父さんが高之さんのお父さんの買はれたその株の現物をいづばい持つて来て、急にそれを無茶苦茶に賣り出したのよ。それだもんだから、高之さんのお父さんの株は、見る見るうちに半値に下つてしまつてね、見てゐた人の話だと、恐しいほどだつたつていふ事よ。それでたうとう高之さんのお父さんが東京へ歸るとすぐに、心配のあまり病氣になられて、どつと寝ついたまま死なれたの。心臓病だつていふ

お話だけれど、まああれは、泰子さんのお父さんの仕業も同じよ。だから大阪の仁禮さんたち、今度だけは暢氣に來られたもんぢやないんだけれど、そこはどういふんでせうね。あれが關西といふものかしれないわ。」

「でも、不思議ね。それでどうして今でも仲が良いのかしら。」と清子は幾らか愁眉を開いたらしかつた。

「それは高之さんのお母さんがお豪いからよ。泰子さんのお母さん早く亡くなつてもうゐらつしやらないし、お店の資金關係が仁禮さんところを度外視するわけにはいかないのよ。けれども、あたしの父が昔から高之さんの家の番頭でせう。

だから、高之さんのお父さんが亡くなられてからは、あそこのお家の一切を切り盛りして、大阪の仁禮さんに對抗して來たもんだから、今でも父とあたしとだけは、誰よりお腹の中ぢや仁禮さんには我慢が出來ないの。ね、分るでせう。あたしの氣持？」と春子は扇子の要で胸を抑へた。

「そりや分るわ。ぢや、随分深刻なのね。大阪と東京との戦争ぢやないの。」

と、清子は自身もいつの間にか、東京方に編成せられてゐる一員だと感じたらしくまた扇子をばたばた急がしさうに動かして、容易ならぬ覺悟にひき緊つて來るのだつた。

「さうなの。あたし、それで高之さんに、どうかして東京の人と結婚させたくて云ふんだけど、あの方賢いから、なかなか

か性根を見せないのよ。」

春子は清子に云ふべきことと云つては不可ないこととに迷ふ風に、あちらこちらを見廻しながら、

「でもね、仁禮さんのお父さんも、年が年なのかしら、この前一寸妙な事があつたのよ。父との關係を直したいんでせうかしら、ある人を通じて、あたしを奥さんに貰ひたいつて云つて來たの。これ少し妙でせう。」

「へええ。」と、清子も理解し難いらしく春子の顔を驚いて眺めてゐた。

「それで、あなた、何と仰言つて？」

「そりや、定つてるぢやないの。」

と、春子は扇子でびしやりと清子の膝を打つた。

「でも、さうぢやないのかもしれないわ。仁禮さんの父さん、あなたのお家とそんなにして仲を直しておけば、泰子さんと高之さんとも、都合よくゆくと思つたのかもしれないわ。」

春子はあきれたと云ふ風に清子の顔を見ながら、

「あなたも随分氣を廻したもののね、ありがたう。」とひやかしてお辭儀した。

「あら、そんなぢやないわ。それとは違ふわ。」

「でも、そんな想像の出來るの、よほど高之さんに好意を持つてなくぢや、出來ないことよ。あたし、云つといてあげ

る。」

清子は顔を眞赤にしながら、

「だつて、そりや、さうよ。さうでなくちや、仁禮さん、どうしてあなたに求婚すると思つて？ 出来ないことだわ。」

「それは失禮よ。あたしだつて、これでまだまだ今世紀なんですからね。」と春子はふんと膨れ返つた。

「それは別よ。あたしは、もつと他のことを云ふんだわ。」

「男にそんな別が、ありますか。」

いざさか開き直つた恰好で春子は物々しく剽軽な顔になつた。

「でも、春子さんはお人がいいのね。あたしだつたら仁禮さんの奥さんになつて、泰子さんをぎゆうぎゆう云はせて上げるんだけど。」

ぶツと噴き出すやうに清子は身を曲げると、その途端に、急に笑ひ事ではなくなつたらしく、見る見る眞面目な顔に變つていつた。

「あなたはそんなことの出来る方よ。あたしも一寸考へたけれど、それだけは、あたしはとても駄目だわ。」

春子は今は笑ひとまつて穩かな顔になつたものの、しかし、そのとき、何心なくふと眺めた清子の眉宇の間から、ただならぬ緊張の色を讀みとると、瞬間、春子はぎよツとなつた。

もし高之と泰子が結婚したなら、清子の事なら、自分に代つて仁禮夫人にならぬとも限らない。——かう思ふと、今さらながら高之を愛してゐる清子の心のふかさに、春子は驚き返るのであつた。

「さア、中へ這入りませう。」

と、春子は云つて立ち上つた。清子も後からつづいた。何となくうす冷たい前後の二人であつたが、舞臺ではをかしい所作事の最中で、見物は暑さも忘れあはあは他愛なく笑ひつづけてゐるところだつた。

朝日のさし込んだ急行が沼津を過ぎると人々は寢臺から降りて來た。二等室で泰子の眼を醒したのも丁度そのころであつた。泰子はひやりとする麻に壺流しを描いた千草染の着物を着て、これも同じく絨麻じゆうまの白地に、源氏車の刺繡をおいた帯を締め、化粧をすましてから友だちの忍しのぶを起した。忍は眼さうにちつとしてゐてから急に勢ひ良く起き上つたが、洋装のこととて仕度も早く、齒を磨いてしまふともう何もするところがなくなつた。

「一時間短縮されても、あんまり早やう東京へ着きすぎたら、却て困るわ。もう一べん寢ようかしら。」

かう忍のいふのにただ泰子は微笑しただけだった。

「高之さん寢坊やで、ぶつぶつ云つてやはるわ、きつと。」

「迎へに来やはらへんと、ええのやけんどな。」

「眠たければ眠つたらどう？」と泰子はしとやかな聲だつた。

「それより、今日、宿屋へ着いてからどうするの。まさか朝から歌舞伎座でもないし。」

いつもの法事だと、この階級の人々は寺で誦經をすましてから、親戚知己一同料理屋へ集りそれで終る。滞在してゐるものは一、二ヶ月何もせずに遊んで廻る習慣である。

しかし、重住家と何の關係もない忍を自分の友達だからと云つて、泰子が法事につれて來ることは、奇怪なことであつたが理由はある。忍と泰子とは、丁度、高之の母と泰子の母が裏千家の親しいお茶の友であつたと同じく、高之を加へて三人は裏千家の仲間であつた。この裏千家のお茶友達といふのは、常人には理解しかねるほど親しいもので、月に一度は京都の裏千家へ集つたり、定宿の吉住で泊つたり、不斷でも東京と大阪との直通電話で落ち合ふ先や、時刻を打ち合せたりするほどである。殊に、高之の母は裏千家から名前を買つたほど東京では素人としては一番の婦人であつた。

けれども、この婦人たちの慰みは何といつても一番に金がかかる。その上、いはゆる和敬清寂をモットーとしてゐるだ

けに品位が何よりなので、一度友達となると姉妹以上の仲間になる。その代りになかなかこの仲間には這入れない。それ故、泰子や忍が重住家の法事に集ることは、春子や尾上やその他の親戚たちの集つて來るのとは、また自ら別の心の美しさからであつた。しかし婦人たちはさうであつたが、重住家と仁禮家との男たちの商賣の世界はこれがまた東京と大阪との戦争である。

仁禮は大阪北濱の仲買店で、重住は東京兜町の仲買店であるが、仁禮が東京へ出て來て、萬と集る株の賣買をする時には、すべて、重住の店に萬事を依頼するので、したがつて、大阪の仁禮からは重住の方へ、いつも數百萬圓に達する株券や公債や現金が廻されてゐる。恐らく、少いときでも百萬圓を下るまい。それであるから、實を云へばこの重住家へ預けてある金が、現在の重住の店の中心資本になつてゐると云つても良かつた。しかし、これが高歩なので高之も尾上も實は苦心以上の腹立たしさもあるのである。

列車が東京驛へ着くと泰子たちは降りた。出迎への群衆の中から高之と彼の母の信江の顔がすぐ見つかつた。

「よくいらつしやいました。お疲れでせう。」

「よう眠れましたの。でも、あんまり早やう着きすぎて、御迷惑ですわね。」

泰子と信江の挨拶の横で忍と高之も挨拶した。忍は自由で



快活で物にこだはりのない伸びやかな性質なためか、高之は泰子より却て人前では忍との方が仲が良かった。高之と泰子は黙つてお辭儀をし合つただけで、それぞれ高之と忍、信江と泰子といふ組み合せで、出口の階段を降りて行つた。自動車に乗るとき、高之は自分が助手臺に乗つて三人の婦人を座席に乗せた。

「高之さん、こちらへお乗りになつたらどう。あたしこのごろ、運轉が上手になつたのでそこの方が安全ですの。」と忍はいつた。

「本當に忍さん、上手になりましたわ。この前京都まで乗せていつてもらひましたの。」

信江にさういふ泰子の後からまた忍はいつた。

「ああ、さうさう、小母さんに教へてあげたいことがありますの。圓山下で、そのとき爐縁の良いのを見付けましたのよ。あたしと泰子さん。これ栗でもないし釋でもないし、何んやらういうてましたら、藤やいやはりますの。そんな爐縁ありますやろか。」

「そりやありますよ。塗縁ですか。」と信江は訊ねた。

「いえ、木地縁でしたわ。」

東京へ出て來ると忍はいつの間にか東京辯になる癖があつたが、ガードの下をくぐつて日本橋の方へ突き抜けていくころには、そろそろ忍の大阪辯も東京語に近づき始めた。

泰子たちは前から電話で打ち合せた通り、今度は重住家で泊らぬ事にしたので、すぐ築地の宿屋の松川へ行つた。ここは泰子の父の定宿なので親戚も同様の宿屋だつた。高之と信江は二人を休息させるためにひと先づ日本橋の家へ引き返した。北向きの二階の十疊で、二人きりになると泰子は疲れた身體をくつたり脇息によせかけた。

「京極さん、今度もお父さんと一緒に來やはるの？」と忍はにやにや笑つて泰子を見た。

「知らん。」

と、泰子は測れたまま答へた。京極といふのは名を練太郎といひ、泰子の父の仁禮文七から京都の大學まで出して、もつたほど寵愛せられてゐる祕書であるが、仁禮の商賣の畫策をほとんど一人で引き受けてゐるほど、駿足敏腕な青年である。仁禮が泰子の婿を京極にしたいと思つてゐる事は前から泰子には分つてゐた。忍は泰子の身に起る事なら何事も打あけられてゐるので、この度の上京も泰子が京極から逃れるために、高之との縁談を何とか調へるやうにしたいと焦つてゐる泰子の心中も、手にとるやうに感じるのであつた。

「法事がすんだら輕井澤へ行つてしまほ。そしたら、京極さんから逃げられるわ。高之さんが來やはれへんなら、あたし、つれて來。」

かう忍が云ふのに、しかし、泰子は黙つて俯向いてゐるき